

生活科

生活することへの意欲や自信を高める生活科の学習指導

○本校の研究主題との関わりから生活科で目指す児童像

「水平思考」との関連

多様な考えを生み出しながら、自分の思いや願いを実現していく児童。

生活科では、児童の思いや願いを大切にすること。それは、「きれいな花がたくさん咲いたから、色水遊びがしたいな。」「学校探検で仲良くなった先生を家族に伝えたいな。」など児童一人一人の思いや願いから学習が始まるからである。児童は、既習経験を生かしながら、主体的に学習対象（身近な人々、社会及び自然）に関わり、思いや願いを実現していく。例えば、栽培活動において、花で遊んでみたいという思いや願いから、「幼稚園や保育園の時に色水遊びしたな。またやってみような。」「今度は、たたき染めをしてみたいな。」「オシロイバナで、パラシュートにして遊びたいな。」などの活動への実現に向けて、思いをめぐらせていく。そして、友達や学級全体で話し合ったり、材料や道具を準備したりするなどして考えを広げたり増やしたりしていく。これが、多様な考えを生み出しながら、自分の思いや願いを実現していく児童の姿である。

「垂直思考」との関連

明確な根拠で考えを絞り込む過程で、具体的な活動や体験を通して獲得したことや工夫したこと等を振り返りながら、自分の考えを再構成し、自分自身の成長に気付く児童。

生活科では、児童が思いや願いを実現するまでの過程において、様々な問題が生じる。それは、問題解決に向けて、「6年生の教室や保健室は、どのように入ったらいいのかな。」「もっと、いろいろな先生と話すためにはどうしたらいいのかな。」などと、主体的に課題を見出していきからである。そして、課題に対する自分の考えを試したり、教師や友達に相談したりすることで、問題解決していく。問題解決した達成感や成就感によって、「学校のいろいろな場所に行くことができたよ。」「学校の先生と仲良くなったよ。」「最初は恥ずかしかったけど、今は元気に挨拶できるよ。」などと、学習対象と自分との関わり方の変容について気付くようになる。このような気付きが次の学習に生かされ、問題解決に向けてよりよい判断となっていく。これが、明確な根拠で考えを絞り込む過程で、具体的な活動や体験を通して獲得したことや工夫したこと等を振り返り、自分自身の成長に気付く児童の姿である。

○自分自身に気付くこととの関わり

「生活科は、あれこれの事柄を覚えればよい教科ではない。具体的な活動や体験を通して、よき生活者として求められる能力や態度を育てることであり、つまるところ自立への基礎を養うことを目指しているのである。」これは、生活科新設の趣旨とねらい（平成元年小学校指導書生活編）の結びに示されている言葉である。生活科の本質は、この言葉に集約されていると考えている。だから、生活科の授業は、低学年児童が具体的な活動や体験を通して思考するという発達上の特徴が見られることを踏まえて展開される。そして、自立への基礎を養うことを目標としている。ここでいう自立への基礎とは、①学習上の自立、②生活上の自立、③精神的な自立である。特に、精神的な自立は、自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自

分自身の在り方に夢や希望をもち、前向きに生活していくことである。このような生活科の本質の一つにせまるために意欲や自信をもつ指導の工夫を考えていく。

そこで、児童が思いや願いを実現していく過程で、学習対象（身近な人々や社会、自然）と自分との関わりや自分自身の成長を振り返ることや、学習対象と自分との関わり方の変容について伝え合い交流することで、自分のよさや可能性に気付くと考える。この気づきを質的に高めることによって、活動や体験は一層充実したものとなり、実際の生活における資質や能力及び態度は確かなものとして身に付いていくであろう。これが生活科の究極の目標である自立への基礎を養うことに大きく関わっていると考える。

本研究で目指す児童を育てるために、これまでの研究との関わりを踏まえて、本研究主題「生活することへの意欲や自信を高める生活科の学習指導」を設定した。

○研究の視点と実践例

生活することへの意欲や自信をもつためには、①学習対象と自分との関わりに気付く学習指導、②学習対象と自分との関わり方の変容から、自分自身の気づきを育む学習指導としていくことが必要である。①学習対象と自分との関わりに気付くためには、学習対象の気づきを可視化したものを活用していく。可視化することで、学習対象と自分との関わりについて振り返ることができる。②学習対象と自分との関わり方の変容から、自分自身の気づきを育むためには、身近な人々と伝え合い交流することを意図的・計画的に設定する。児童が学習対象と自分との関わりについて振り返り表現したことを基に、伝え合い交流することで、身近な人々からの他者評価により、自分自身の気づきを育むことができる。

そこで、次のような研究の視点と手立てを考え、実践を通して検証を試みる。

視点1 学習対象の気づきを可視化したものを活用することで、学習対象と自分との関わりに気付くようにする。

<手立て1>学習対象の気づきを可視化したものを活用できるように、見付ける、比べる、たとえるなどの多様な学習活動を意図的に授業の中に設定する。このとき、児童一人一人の思いや願いの多様性を生かす場面を設定することで、水平思考（主に、問題把握力）できるようにしていく。また児童が対象との関わりについて振り返られるようにしていくことで、水平思考（主に、発想力）できるようにしていく。【本時：齋藤】

<手立て2>学習対象の気づきを可視化したものを活用できるように、学習対象と児童の関わりについての見取りも掲示物上に示していく。このとき、学習対象の気づきを基に、次の活動を決定する場面を設定することで、垂直思考（主に分析比較力、取捨選択力）できるようにしていく。【紀要：例1】【本時：若村】

視点2 身近な人々と伝え合い交流することを意図的・計画的に設定することで、学習対象と自分との関わり方の変容から、自分自身の気づきを育むようにする。

<手立て3>身近な人々と伝え合い交流することを意図的・計画的に設定するために、教師との対話により児童が伝えたいことを明確にする。このとき、学習対象と自分との関わり方の変容について伝え合い交流するための準備をすることで、水平思考・垂直思考（主に分類・整理力）できるようにしていく。【紀要：例2】【本時：若村】

<手立て4>身近な人々と伝え合い交流することを意図的・計画的に設定するために、他者評価を児童が受け取り、それを踏まえて自己評価できるようにしていく。このとき、他者評価から自分自身の成長に関わることの観点の共有を図ることで、垂直思考（主に、分析比較力）できるようにしていく。【紀要：例3】【本時：齋藤】